



熊本大学設立60周年/横井小楠生誕200年・没後140年記念

■第26回熊本大学附属図書館貴重資料展

期 間 平成21年10月31日(土)～11月2日(月)

会 場 熊本大学附属図書館自由閲覧室

解説目録

新しい横井小楠像の 構築を目指して



公開講演会

日 時 平成21年10月31日(土) 14:00～15:00

会 場 放送大学熊本学習センター講義室

講 師 三澤 純 熊本大学文学部准教授

平成21年度
熊本大学附属図書館

今年は、横井小楠（文化6年[1809]～明治2年[1869]）が生まれて200年目に当たる節日の年である。しかも彼は、数え年でちょうど60歳を迎えた明治2年正月に不幸にも暗殺されてしまうから、今年は没後140年目にも当たる。彼は、幕末維新期の熊本藩関係者の中で、明治維新の変革において、最も大きな活躍をした人物であったから、熊本では今年、彼に関する実に様々な催し物が開かれている。これも、その中の一つなのであるが、本資料展には、他の企画にはない大きな特色が二つあると自負している。

一つ目は、2007年に、横井小楠の曾孫に当たられる横井和子氏（大阪教育大学名誉教授）から本学に寄託された「横井家文書」を活用した、初めての本格的な展覧会であるということである。この文書が本学に寄託されるまでの背景については、熊本大学図書館報『東光原』50号（2008年5月）所載の拙稿で若干述べたことがあるが、長い間、一部の研究者のみが知るに止まっていたこの文書が、この資料展を通して、広く市民の目に触れるということの意義は計り知れない。

二つ目は、これまた本学に寄託されている、永青文庫細川家文書の中から、横井小楠に関する史料を選んで、併せて展示していることである。永青文庫は言うまでもなく、彼が所属していた熊本藩の文書群であるから、彼に関わる史料の数も多いが、今回は『肥後藩国事史料』等で、これまでに紹介されていない新史料を中心に選んだ。

ところで、本資料展の構成を考えるに際して、私はあえて資料によって横井小楠の全生涯をたどるというオーソドックスな手法を採らなかった。というのも、そのような手法の展示であるなら、彼には既に熊本市立横井小楠記念館という個人博物館があるし、『横井小楠のすべて』（新人物往来社、1998年）というハンディなガイドブックも刊行されているからである。

本資料展では、横井小楠という人物を、「家」「家族」「著作」「交友」「弟子」「愛用品」という六つの側面から捉えようとした。本学架蔵の資料のみで、彼の人生の全過程に迫ることが無理であることはもとより承知のうえであるが、本学架蔵の資料だからこそ描くことができた横井小楠の人物像であるということもまた確かなことである。本資料展をご覧になった皆さんには、これまで紹介されている小楠像とは異なるイメージを実感していただければ幸いである。

なお、彼には「平四郎」「時存」「小楠」「沼山」「畏齋」等々、多くの呼称があるが、本目録及び展示資料のキャプションでは、「横井小楠」に統一したことを付記しておく。また紙数の都合で、解説文に書ききれなかったことは、付録1「横井小楠略年譜」、付録2「横井家略系図」を参照していただきたい。

2009年秋

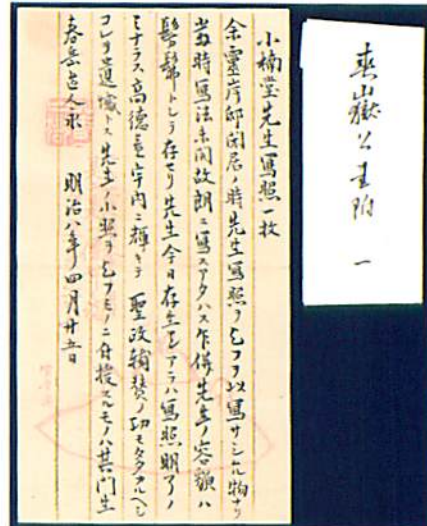
三澤 純

プロローグ 横井小楠という人

展示資料1 「(明治8年4月25日付、横井小楠の写真につき松平慶永の書付)」

(横井家文書A 120)

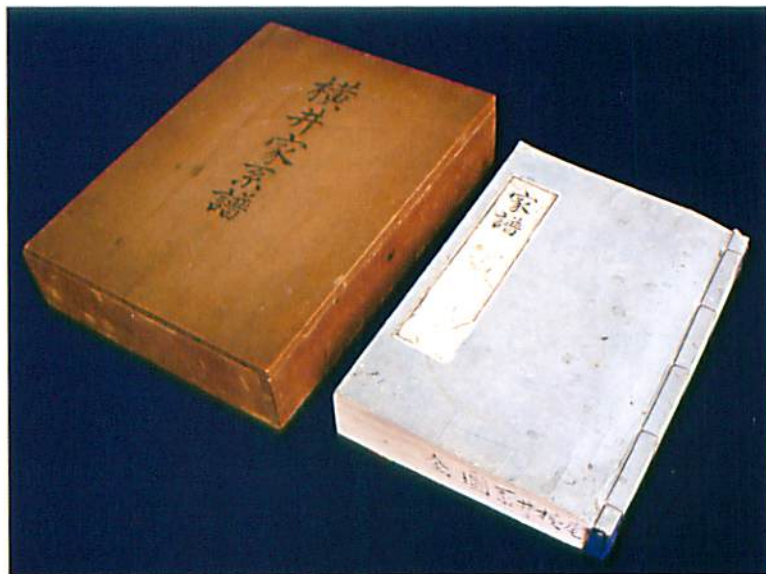
世に広く知られている小楠の写真は、松平慶永が、安政の大獄で「隠居謹慎」処分を受けていた時、慶永が望んで、わざわざ福井から送ってもらったものだということが分かる史料。慶永が「当時の写真技術が発達していないせいで、先生が微笑んでおられないことが残念」と書いていることも面白い。当時、困難の極みにあった慶永が、せめて写真であっても自分の側にいてほしいと考えた師・横井小楠とは、一体、どのような人物であったのであろうか？



I. 「家」

展示資料2 「横井家家譜」(横井家文書A 198)

小楠が嘉永4(1851)年2月に西日本巡遊の旅に出た時、横井家発祥の地である名古屋には半月も滞在した。その間、小楠は同姓の横井諸家を訪問して家系図を調査したり、菩提寺に参詣したりしている。これは、その時の小楠の依頼に応じて、名古屋の横井時紀が自家の家系図を書き写して、後日送ってくれたものである。

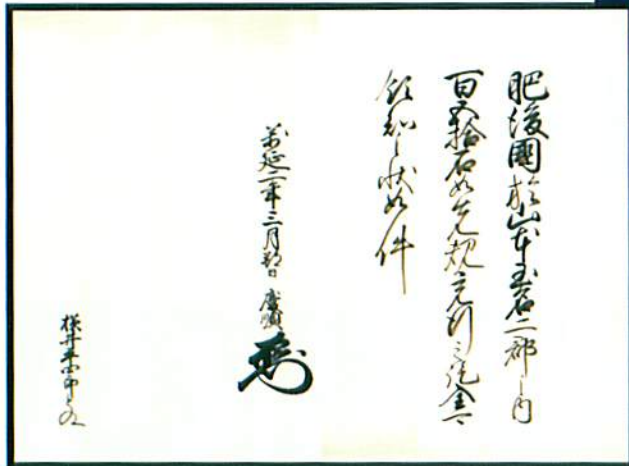


展示資料3 「先祖附 よの部」(永青文庫細川家文書・南東 21)

細川家中の「先祖附」のうちの一冊で、尾張横井家が肥後に移り住んで以降、六代にわたる横井家当主の履歴が記載されている。こうした情報を藩に提出するに当たって、展示資料2が活用されたことは想像に難くない。この「先祖附」の中に、六代目当主である小楠の、いわゆる「土道忘却事件」とその後の処分について記載されていることから、横井家が提出した報告書は元治元(1864)年以降に、小楠自身によって書かれたと考えられる。

展示資料4 「知行宛行状」(横井家文書A 221 ⑩)

「當家要用之諸書附」と墨書された木箱に、歴代藩主から横井家当主に発給された知行宛^{あてがひ}行状が保存されている。箱蓋の裏書きには、横井家がこの箱を作ったのが「文政年中」である旨が書かれている。展示した資料は、万延2(1861)年3月1日付で、横井小楠が藩主細川慶順から発給されたものである。



展示資料5 「安政5年2月29日付、福井行辞令」(横井家文書A 36)

福井藩主松平慶永が、義父(妻の実父)でもある熊本藩主細川斉護に、何度も長文の書翰を認め、横井小楠の福井への派遣を願い出ていることはよく知られた史実である(それらの書翰の一部は『肥後藩国事史料』に掲載されており、その原本は永青文庫に所蔵されている)。本資料は、その願いがようやく許可された時に、藩から小楠に与えられた辞令である。この時、横井家が平野九郎右衛門組に属しており、この種の辞令は組頭から手交されることを示す資料として展示した。

展示資料6 「安政3年12月、親類縁者附」(横井家文書A 57)

本資料は、横井小楠が、組頭平野常之助に提出した親類縁者のリストである。と言っても、小楠の妻つせの実家で、惣庄屋・矢島家の記載がないから、藩士に限ったリストということになる。

本資料は、小楠とつせの結婚に関する一つの側面を浮かび上がらせる。藩士である小楠が、もしこの結婚を正式に進めようとするならば、つせを一度しかるべき藩士家の養女にして、それから婚礼を執り行うべきであった。そうしていれば本資料の中に、つせの養家を書き込まれたはずであるが、小楠はそうした手続きを省略したのである。これも彼の現実主義的性格の一面であるのだろうか？

II. 「家族」

展示資料7 「慶応4年5月24日付、家族宛横井小楠書翰」(横井家文書A 59)

この書翰が書かれたのは、小楠が京都に行き、新政府の参与という重職に就いた直後の時期に当たる。この書翰で、小楠は、新政府内での自分の仕事場の様子を、事細かく、熊本の家族たち、即ち兄嫁の「至誠院」(兄左平太の妻・きよ)、妻の「つせ(津世)」、長男の「又雄」(後に牧師・政治家として活躍する横井時雄)を宛先にして説明している。特に若き明治天皇(この時は数え年で17歳。以下、本目録で年齢を表記する際は全て数え年とする)について詳しく書いており、玉座の様子や天皇の風貌を、詳しく伝えている。

また家族一人ひとりへの気遣いも忘れずに書き送っている。兄嫁には煙草入れを特注しているので楽しみに待っていて欲しいと記し、この時、12歳の又雄には、又雄が獲った川海老(おそらく、つせが佃煮にして送ったのであろう)を食べた礼を述べている。又雄が「読書修行且英学」を一生懸命にやれば、「墨・筆はもちろん、ご褒美に色々な書物を贈ってやる」とか、当時7歳の長女みや(後に海老名弾正の妻となるみや子)に対して、「母親の言うことを聞かなければ、先日贈った『かたびら』(単衣の夏服)は取り上げる。言うことをよく聞けば、着物の他、お菓子も贈ってやる」という箇所には、幼子を熊本に残し、京都に単身赴任して働いている「父・小楠」の顔を読み取ることができる。

展示資料8 「(横井家アルバム)」(横井家文書A 222)

本資料は、横井家文書中に残された唯一のアルバムである。展示箇所の右側の写真は、山崎正董が小楠の長女・みや子として紹介した写真である。この中には他にも、例えば、小楠が『海国図志』等の海外情報書を読んで、「堯舜の道」を具体的に実践した人物として尊敬するようになったワシントンの肖像等が含まれている。

展示資料9 「(明治2年8月、横井小楠養母の褒賞申請及び詮議記録)」

(永青文庫細川家文書 13—5—23「僉議控一」)

本資料は、親戚の横井牛右衛門と横井覚之助が連名で、小楠暗殺を機に、横井小楠養母(前掲の至誠院のこと)への褒賞と、小楠の順養子・左平太の召抱えを藩に願い出た時の申請書写と、それについての藩側の詮議記録である。両件とも、慶応4(1868)年3月に小楠が一度は剥奪された士席に復していることを根拠に願い出られている。藩側は、この時、養母に褒賞(「四人扶持」)を与えることのみを許可したが、明治3(1870)年閏10月、左平太に対し、横井家の家名取立てについても許可した。

展示資料10 「文久3年1月26日付、横井左平太「口上之覚」」

(永青文庫細川家文書 14—11—3「京都諸控」)

文久3(1863)年の小楠は、少なくとも傍目から見れば、ジェットコースターに乗っているかのように人生の「山」と「谷」を幾度も経験した。まず最初の「谷」は、前年末の、いわゆる「士道忘却」事件のため、江戸から福井へ送られたことである。

本資料は、養子の左平太が、小楠が起こした事件の重大さを聞き、熊本から小楠のもとへ駆けつける際に、行先を江戸から福井に変更する必要に迫られ、京都の熊本藩邸に提出した願書の写である。この願書を作成・提出したときの左平太は、「小楠に会うことができる機会は、これが最後」という心境であったと思われる。これまで左平太が同年2月3日に福井に到着し、小楠と無事に面会を果たしていることは、小楠の家族宛書翰(前掲『横井小楠』遺稿編所収)から知られていたが、その過程が分かる史料はこれが最初の紹介となるだろう。

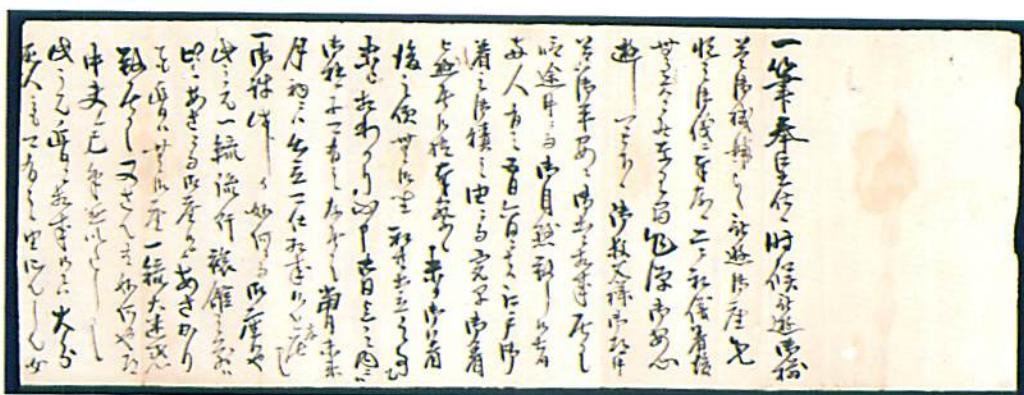
ちなみに同年中の「山」は、福井に戻った小楠が、幕末政治史上に名高い「挙藩上洛計画」の中心的立案者となり、全国諸藩から大きな注目を浴びることであり、もう一つの「谷」は、その「挙藩上洛計画」が中止に追い込まれ、熊本に戻った小楠に「士道忘却」事件の裁決が下り、横井家の知行召上げ・士席剥奪処分が申し渡されることである。

展示資料11 「文久2年7月12日付、家族宛横井大平書翰」(横井家文書A 145)

本資料は、福井にいる大平が熊本の家族(実母=きよ、兄=左平太、養母=つせ)に宛てて近況を報告した書翰である。小楠は同年6月に熊本を出発し福井を目指したが、この旅には大平や内藤泰吉(「弟子」の項を参照)も随行していた。しかし途中で、松平慶永の急使に迎えられ、小楠のみ江戸に向かっている(この後、まもなくして大平たちも江戸へ向かう)。

この書翰で、大平は福井での麻疹の大流行を報じ、熊本のことを気にしている。福井では「ずいぶんたくさんの方が亡くなっているようで、特に妊婦の死者が一番多い」と述べているのは、この時、まさに妊娠していた養母(同年9月15日に長女みやを出産)のことを特に心配していたからだろう。

ただ「熊本のスイカがうらやましい」と三度も繰り返しているところに大平の幼さ(この年13歳)が感じられる。



展示資料 12 「(明治3年7月、横井家下女・寿加の褒賞詮議記録)」

(永青文庫細川家文書文2—3—14「一新達帳」)

本資料は、横井小楠の死後、長らく横井家に下女として仕えた寿加を褒賞するべく、藩庁が彼女の履歴を調査したときの記録である。この記録には、寿加は安政2(1855)年3月から横井家に奉公し始め、気性の激しい当主・小楠によく仕えたこと、長女みやを出産した後、津世が体調を崩すと横井家の家事一切を彼女が取り仕切るようになったこと、小楠死後も彼女の態度は変わらず、明治2年秋に大平が病気になり、長崎に治療に赴いた際にも付き添い献身的な看病をしたこと、このような彼女の働きぶりに横井家の人々は、彼女を家族同様に遇していたこと等が記録されている。この調査結果を踏まえて、藩は彼女に賞与として「金子二百疋」を下すことを決定している。

三澤は、京都市の南禅寺天授庵にある小楠の墓を訪れた際、立派な小楠の墓石の脇に、彼女の墓が小さいけれどもきちんとあることを見て、彼女に対する横井家の人々の暖かい想いを知り、爽やかな気持ちになったことを覚えている。

Ⅲ. 「著作」

展示資料 13 「畏齋先生遊歴之節々諸国之風土御見聞書写」、嘉永 4 年

(横井家文書 A 185)

展示資料 2 のところで述べた嘉永 4 (1851) 年の西日本巡遊時の道中記録『横井小楠』伝記編・遺稿編の著者山崎正董氏は、本資料を、この旅で小楠が柳川藩から紀州藩までに見聞したことを、随行していた徳富一義に口述筆記させ、熊本の長岡監物(「交友」の項を参照)に送らせたものと考証している。一般には、山崎の命名になる「遊歴聞見書」として知られている。なお「畏齋」とは、小楠の号の一つである。

展示資料 14 土井直康書「文武一途之説」、制作年未詳

(但し「文武一途之説」は嘉永 6 年 1 月執筆)(横井家文書 A 214)

本資料は、小楠の「文武一途之説」を、土井直康なる人物が書写し、軸装したものである。制作年、土井の履歴、土井と小楠との関係も全て未詳であるが、漢詩文以外の小楠の著作が軸装されているのは珍しいと考え、展示することにした。

「文武一途之説」は、諸種の情報から、この年の夏に外国軍艦が来港することをおぼろげながら知っていた小楠が、その影響で世論が「武」に偏ることを警戒して書いたものである。小楠が、これを福井藩士・村田氏寿に送り、同藩内有志に回覧されることを期待したのは、前年に「学校問答書」を書いて、藩校運営のアドバイスをした福井藩が「武」偏重路線に傾くことを恐れたからである。

小楠は、決して「武」を軽視している訳ではない。原理原則を尊重することなく、なし崩し的に政治路線が変えられてしまうことを強く戒めているのである。その意味で、その後、大きく花開いていく小楠思想の原点が著述されていることを重視したい。

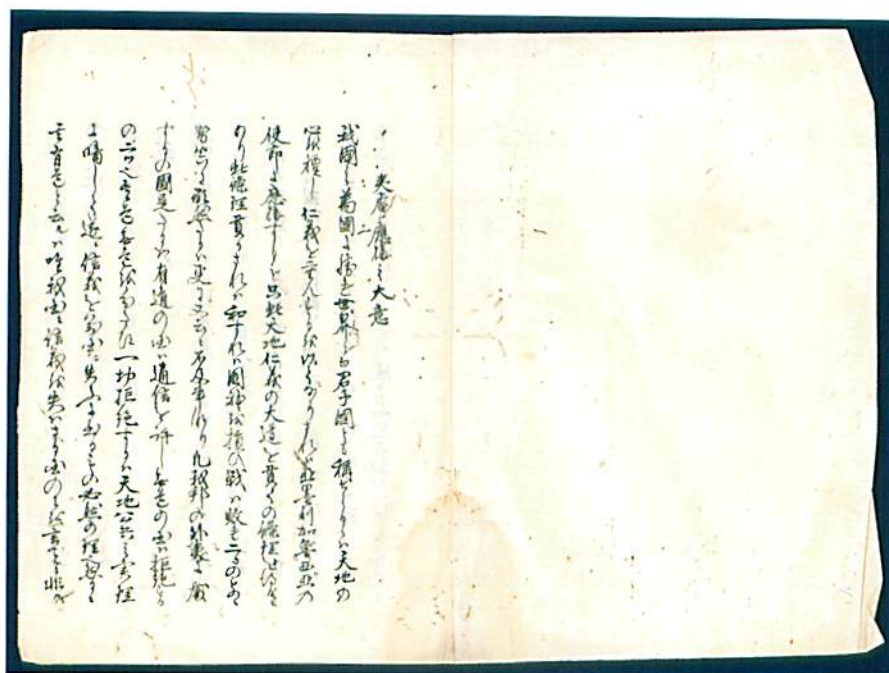
展示資料 15 「夷虜応接之大意」、嘉永 6 年 11 月頃(横井家文書 A 181)

嘉永 6 (1853) 年は、6 月 3 日にアメリカ使節ペリーが浦賀へ、7 月 18 日にロシア使節プチャーチンが来航した年である。このように風雲急を告げる時期にあつて、横井小楠は、今後も増えていくであろう外国勢力との対応指針を「夷虜応接大意」としてまとめた。

ここで展開される議論の支柱は、「有道の国は通信を許し、無道の国は拒絶する」というものであった。すなわち日本に接触してくる外国勢力が「仁義を重んずる国=有道の国」であれば国交を開き、「無道の国」であればその要求を拒絶するという意味である。これは、単に「鎖国」か「開国」かという論争に明け暮れていた当時の状況においては、最先端の内容を示していた。加えて小楠は、この指針を世界的な対外行動規範とすることを通じて、「天地公共の実理」(公平・平等な世界秩序)を構築しようとしており、近年、人文・社会諸科学において「公共哲学」というキーワードがクローズアップされている中で、国際的にも、特に注目されている著作である。

本資料については執筆の年代や背景に不明な点が多かったが、近年、小楠の弟子の矢島源助書翰の分析によって、これが嘉永 6 年 11 月頃に書かれたものであり、長崎奉

行水野忠徳宛に提出されたものであること等が明らかとなった（2009年9月13日、第16回横井小楠と変革期思想学会における宮川聖子氏の研究発表「幕末期異国船来航情報と横井小楠の思想変容」による）。なお一般には「夷慮応接大意」として知られているが、本資料は「夷慮応接之大意」となっている。

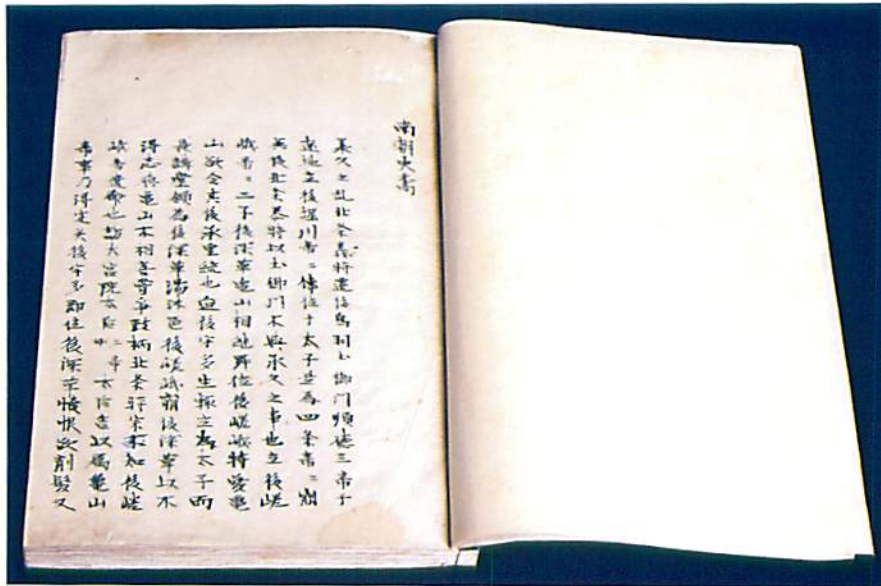


展示資料 16 「小楠堂詩草」、天保 11 年～元治元年（横井家文書 A 182）

本資料は、小楠の詩作ノートとでも呼ぶべきもので、1929年に民友社から影印本として刊行された、小楠の漢詩集『小楠堂詩草』の原型に当たると思われるものである。野口宗親氏の論文「福井時代の横井小楠—漢詩を通して—」（『熊本大学教育学部紀要人文科学』第57号〔2008年〕）によれば、『小楠堂詩草』には130首の漢詩が、作成年代順に収められており、そのうち56首が安政5（1858）年から文久3（1863）年までの福井藩滞在中に作られたものだという。刊行本とは異なり、一つひとつの漢詩の修正過程がよく分かる本資料からは、小楠の詩作過程における「苦闘」の跡を見ることが出来る。

展示資料 17 「南朝史稿」、天保 11 年～嘉永 3 年頃（横井家文書 A 172）

小楠が、儒学の諸科目の内、特に史学を得意としたことは、彼の思想を考える上で大切な視点である。本資料は、数ある彼の史論の中でも最も大部なもので、最初の江戸遊学から帰国した天保 11 (1840) 年頃から数年間にわたって書き続けられたが、結局、未完に終わった作品である。執筆の動機、未完の理由等、不明な部分も多く、今後の研究が待たれるが、その際には、この作品を小楠の史論全体の中に位置づける必要があるだろう。



展示資料 18 『秋声窓小録』二、慶応 4 年 5 月板行（三澤純所蔵）

小楠が上京し、新政府の参与に任じられた慶応 4 (1868) 年 4～5 月、福井藩家老本田家の家臣で、弟子の関義臣（後に山形県知事・貴族院議員等を歴任）が小楠の著作三種を京都で板行している。『秋声窓小録』一には熊沢蕃山「学校問答」と小楠「学校問答」が、『同』二には、小楠の「文武一途之説」と「兵法問答書」とが収められた。師の新政府出仕に対して、弟子からの贈り物であったのだろうか。

蕃山と小楠の著作がワンセットで板行されている点が思想史的にも興味深い。何よりも小楠存命中に、彼の著作が板行されていること自体が新知見であり、今後の研究が望まれる。なお「秋声窓」とは関の文庫名のことらしい。

IV. 「交友」

展示資料 19 「天保 10 年 6 月 17 日付、横井小楠宛長岡監物書翰」(横井家文書 A 29)

長岡監物(是容)は、熊本藩内に三つある世襲家老家の一つ、米田家の当主であり、藩主細川家の旧姓である「長岡」を名乗ることを許された、禄高 1 万 5 千石の大身武士である。禄高 150 石の横井家とは格段の身分差があるが、二人は学問を通じて深い親交を結んでいた。鎌田浩氏は、その著書『熊本藩の法と政治』(創文社、1998 年)に収められた諸論文の中で、小楠の主張が、監物を通じて「部分的ではあるが藩政上実現された」ことを強調しているが、これは今日においても大事な指摘である。後に、この二人は外交方針をめぐる絶交してしまうが、両者の関係性を、長いスパンで注意深く整理していく必要性の大きさには変わりはない。

本資料は、小楠の最初の江戸遊学の最中に熊本から出されたものである。この中で監物は、江戸で、佐藤一斉・松崎慊堂・藤田東湖らそうそうたる人物たちと交遊しているであろう小楠を羨みつつ、減酒をし、酒の上での失敗だけはしないようにと強く戒めている。

展示資料 20 「嘉永 4 年 2 月 15 日付、藤田虎之助宛横井小楠書翰写」(横井家文書 A 44)

藤田虎之助(号は東湖)は、水戸藩士で、学者としても有名な人物。水戸藩主徳川斉昭の厚い信任の下、同藩の藩政改革を主導するが、小楠が彼と交遊関係を結ぶのは、彼が大活躍を続け、全国諸藩からの注目を集めていた天保 10(1839)年で、小楠の江戸遊学中のことであった。その後、弘化元(1844)年に斉昭は幕府から謹慎処分を受け、藤田も蟄居処分となってしまう。本資料において小楠は、藤田に与えられた長く、厳しい処分がようやく緩み始めたことを喜ぶと同時に、その背景にあった藩内の派閥抗争を「当今天下列藩之大病根」と呼び、痛烈に批判している。このような小楠の意見は、後に「朋党の病を建言す」(文久 3 年 4 月)において全面的に展開されることになる。

なお本資料は、同年 3 月 20 日に、弟子の江口純三郎によって書き写されたものである。

展示資料 21 「嘉永 7 年 1 月 29 日付、横井平四郎宛八田喜左衛門書翰」

(横井家文書 A 101)

八田は薩摩藩の京都藩邸留守居役・御広敷番頭等の重職を勤めた人物。彼はこの書翰で小楠にペリー再来航に関する最新情報を伝えている。このことを踏まえて、改めて小楠と薩摩藩との関係を考えてみると、小楠は関勇助・鮫島正介ら同藩士と親しく交遊しており、弟子も少なからず存在していたらしいことが分かってくる。言うまでもなく、薩摩藩は琉球を介した独自のネットワークを持ち、質量ともに優れた海外情報を蓄積していた。今後の研究において、横井小楠の情報源としての「薩摩ルート」が究明されなければならないという意味で、本資料は重要な書翰だといえる。

展示資料 22 「(年不詳) 10月17日付、横井小楠宛大久保忠寛書翰」(横井家文書A 74)

大久保忠寛(号は一翁)は、外国奉行・大目付等の重職を歴任した幕臣。文久年間(1861～1863)、横井小楠が松平慶永のブレーンとして中央政界で活躍するようになった頃、両者は深い親交を結び始める。

本資料には、両者間でしか分からないことが書かれており、内容同定や年代比定が難しいが、大久保が小楠の考えを「出格意外」と賞賛しつつも、実現は困難だろうとの見込みを述べている。これまで大久保宛の小楠書翰は一通も確認されておらず、今後、史料収集が進み、研究が深化していけば、本資料の歴史的な位置付けも定まってくると期待される。

展示資料 23 「慶応4年10月4日付、横井小楠宛立花壱岐書翰」(横井家文書A 39)

立花壱岐は柳川藩家老立花家の養子で、同藩の大組頭を勤めた。同藩における横井小楠門下の中心人物で、幕末期の藩政改革を主導した。

本資料で立花は、徴士(新政府が諸藩士から、特に優秀な人物を選んで任命した官吏)として9月29日に上京したが、長旅による疲れのため、まだ小楠に挨拶に行っていないことを詫言っている。

V. 「弟子」

展示資料 24 「文久3年5月22日付、横井家宛内藤泰吉書翰」(横井家文書A 115)

内藤泰吉は小楠の門弟で医者。持病のため体調が優れないことが多かった小楠に随行することが多く、本資料が書かれた時も、福井で小楠の側近くにいた。と言っても、小楠の侍医ではなく、本資料に書かれているように、この年の5月16日に、京都の熊本藩邸の「外様御医師御雇」に任じられている。

だが医者の内藤が小楠の側にいてくれることは、熊本の家族にとって大きな安心であったに違いなく、本資料からも、内藤に対する家族の絶大な信頼を読み取ることができる。内藤もよくこれに応えており、小楠の身の世話を下女のこと等、あれこれと気を配り、その様子を熊本に知らせている。

展示資料 25 「慶応3年2月28日付、伊勢佐太郎・沼川三郎宛熊本御社中書翰」

(横井家文書A 143)

伊勢佐太郎は横井左平太の、沼川三郎は横井大平の変名であり、本資料は小楠の熊本の門下生たちの集団(「熊本御社中」)が、彼ら兄弟に送った書翰である。左平太らは、前年4月に、門下生たちの努力、特に小楠の第一の門人であった徳富一敬(徳富蘇峰・蘆花兄弟の父)が山林等を売り払って作った資金によって、半ば密航の形で(だから名前を変えなければならなかった)、長崎を出国してアメリカへ向けて出国していた。

この書翰で、門下生たちは、アメリカ滞在中（ラトガース大学附属のグラマースクールに在学）の横井兄弟に対して、緊迫する日本国内の政治情勢とともに、小楠や熊本留守家族の動静を報じている。中でも、横井兄弟と門下生たちの最大の関心事は、留学資金の捻出問題で、門下生たちも遠い外国の地で、彼らに金の心配をさせることを申し訳ないと謝っている。小楠とその門下生たちの強い結びつきを感じさせる資料である。

展示資料 26 安場男爵家文書（永青文庫細川家文書・侯爵細川家編纂事務所収集史料）

安場保和は小楠の門弟で、明治期に福岡県令・貴族院議員・北海道長官等を歴任した政治家。明治前期に自由民権運動に参加していった他の門弟たちと袂を分かち、元田永孚らとともに、これと対立する政府側に身を置いた。しかし双方とも師・小楠の教えを守っているのは自分たちだと考えていたところが、小楠思想の幅広さ、奥深さを物語っていて興味深い。これまでの研究は、前者のみに光を当ててきたから、今後は安場や元田の思想や行動から、小楠思想を逆照射することが必要となるだろう。なお安場の生涯については、鶴見俊輔他著『安場保和伝』（藤原書店、2006年）がある。「安場男爵家文書」と題されたこの写本は、侯爵細川家編纂事務所が『肥後藩国事史料』編纂のために収集した諸史料のうちの一つと考えられる。この中の史料で注目すべきなのは、元田永孚が安場に宛てた書翰や意見書草稿であるが、これらは三澤「史料紹介 新出の元田永孚書翰について」（熊本大学文学部『文学部論叢』第82号）で紹介しておいた。

VI. 「愛用品」

展示資料 27 「(所蔵雑誌・新聞目録)」(横井家文書A 96)

本資料は、小楠の手許にあった新政府発行の雑誌類のリストである。欠本の印が付けられているところから、京都に随行していた門弟たちが、書籍・書類整理の際に作成したものではないかと考えられる。

展示資料 28 「(美術品所蔵目録)」(横井家文書A 97)

本資料は、小楠が所持していた掛軸・刀剣・具足・鐔等^{つば}、主として美術品的価値のあるものについてのリストである。中には、「火事羽織」「ランプ」（ランプのことだろう）等もあって面白い。京都で買い求めたり、贈られたりしたものだろうか。

展示資料 29 「(御用状箱)」(横井家文書A 226)

本資料は、箱蓋の表に「參與 横井平四郎」と墨書されている状箱である。おそらく新政府と小楠の家宅との間で書状がやり取りされる際に使用されたのであろう。

展示資料 30 「(慶応4年5月16日付、横井小楠宛弁事通達)」(横井家文書A 91)

本資料は、展示資料29を上記のように推定する時、その中に入れられて小楠のもとに届けられたと考えられる通達である。「弁事」とは新政府内の総務的部署で、この通達では、「今日、天皇から酒饌が下げ渡されたが、あなたは欠席していたのでここに届ける」という趣旨が書かれている。

展示資料 31 「(印譜)」(横井家文書A 53)

小楠が使用していた印鑑の印譜。

エピソード

展示資料 32 「(横井左平太・横井大平への送別の辞)」(複製)(横井家文書A 234 ③)

本資料は、展示資料25で解説した左平太・大平のアメリカ留学に際して、小楠が書き送った有名な言葉である。

堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を尽くさば、なんぞ富国に止まらん、
なんぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ、
心に逆らうこと有るも人を尤むること勿れ、人を尤むれば徳を損す、
為さんと欲する所有るも心に正にする勿れ、心に正にすれば事を破る、
君子の道は身を脩むるに在り

この言葉を贈られた兄弟のうち、弟大平は、渡米3年足らずの明治2(1869)年秋、肺を病んで帰国する。病身をおして熊本洋学校の設立に奔走し、お雇い外国人ジェーンズ招聘に成功するが、開校を見ずに、明治4(1871)年に22歳で死去した。兄左平太はいったん帰国した後、再渡米する。再帰国して、元老院権少書記官となるが、彼も肺病のために明治8(1875)年に31歳で死去した。

この言葉、特にその前半部分は、戦前には日本の侵略戦争を肯定する文脈で読まれたこともあったが、本来は儒学を主柱にした原理・原則を大切にして、世界中の混乱・紛争を平和的に解決しようと考えた、小楠の理想と重ね合わせて読まれるべきであろう。その意味では、小楠の理想の実現は、21世紀を生きる私たちの努力に委ねられているのである。

本解説目録は、宮川聖子氏(熊本大学社会文化科学研究科博士前期課程1年)の協力を得て、三澤純(熊本大学文学部准教授)が執筆したものである。

付録1)

横井小楠 略年譜

文化6(1809)年8月13日

肥後藩士横井時直(世禄 150 石)の次男として、熊本城下内坪井町に生まれる。

文化13(1816)年

このころ藩校時習館に入学。

天保2(1831)年11月

兄左平太が家督相続し、以後、時明を名乗る。

天保4(1833)年6月

時習館居寮生となる。居寮生とは、一般課程に対する専攻課程に当たるもの。

天保8(1837)年2月

居寮長に昇進(毎年、米10俵の手当)。

天保10(1839)年3月

江戸遊学の命を受け出発。翌年4月、熊本に帰着。

天保14(1843)年

長岡監物・下津休也・荻昌国・元田永孚と講学(実学党の起こり。但し天保12年説もあり)。このころ私塾を開き、塾生漸次増加。

弘化4(1847)年

兄左平太の居宅に塾舎を新築し、小楠堂と命名。塾生20余人寄宿。

嘉永2(1849)年10月

福井藩士三寺三作の訪問を受ける。

嘉永3(1850)年12月

吉田松陰の訪問を受ける。

嘉永4(1851)年2月

北九州・山陽道・南海道・畿内・東海道・北陸道の20余藩巡歴の旅に出る。8月に帰藩。この間、2度福井藩に滞在。

嘉永6(1853)年6月

アメリカ使節ペリー、浦賀来航。

7月

ロシア使節プチャーチン、長崎来航。

10月

再び吉田松陰の訪問を受ける。

この前後に、「夷虜応接之大意」を執筆する。

嘉永7(1854)年9月=安政元年

兄時明の病死に伴い、家督相続。

安政2(1855)年5月

熊本郊外沼山津村に転居。転居先を四時軒と命名。

安政4(1857)年5月

福井藩士村田氏寿、藩主松平春嶽の命で来熊し、小楠招聘の意を伝える。

安政5(1858)年3月

熊本を出発し、福井藩へ向かう。福井藩は賓師の礼をもって迎え、50人扶持を与える。

以後、文久3(1863)年まで福井で藩政改革を主導しつつ、京都・江戸と熊本とを往復する生活を送る。

文久3(1863)年12月

前年、江戸で引き起こした土道忘却事件(熊本藩士との酒宴の際、刺客に襲われ、小楠のみ脱出した事件)の判決が下り、知行召上げ・士籍剥奪される。以後、慶応4(1868)年3月まで沼山津に蟄居。

元治元(1864)年3月

坂本龍馬の訪問を受ける。

4月

再び坂本龍馬の訪問を受ける。

慶応元(1865)年5月

3度目の坂本龍馬の訪問を受ける。

慶応3(1867)年12月18日

新政府より召命。

慶応4(1868)年3月=明治元年

新政府より再度の召命。これに対し、肥後藩は小楠の士籍を回復し、上京を命じる。

4月

参与に任じられ、従四位下に叙せられる。

5月

「熊本の家族宛書翰」を書き、近況を知らせる。この月下旬から病状悪化し、欠勤し始める。

9月

この月初旬に快復し、15日から出勤。

11月

時々欠勤。

12月

再び病状悪化。

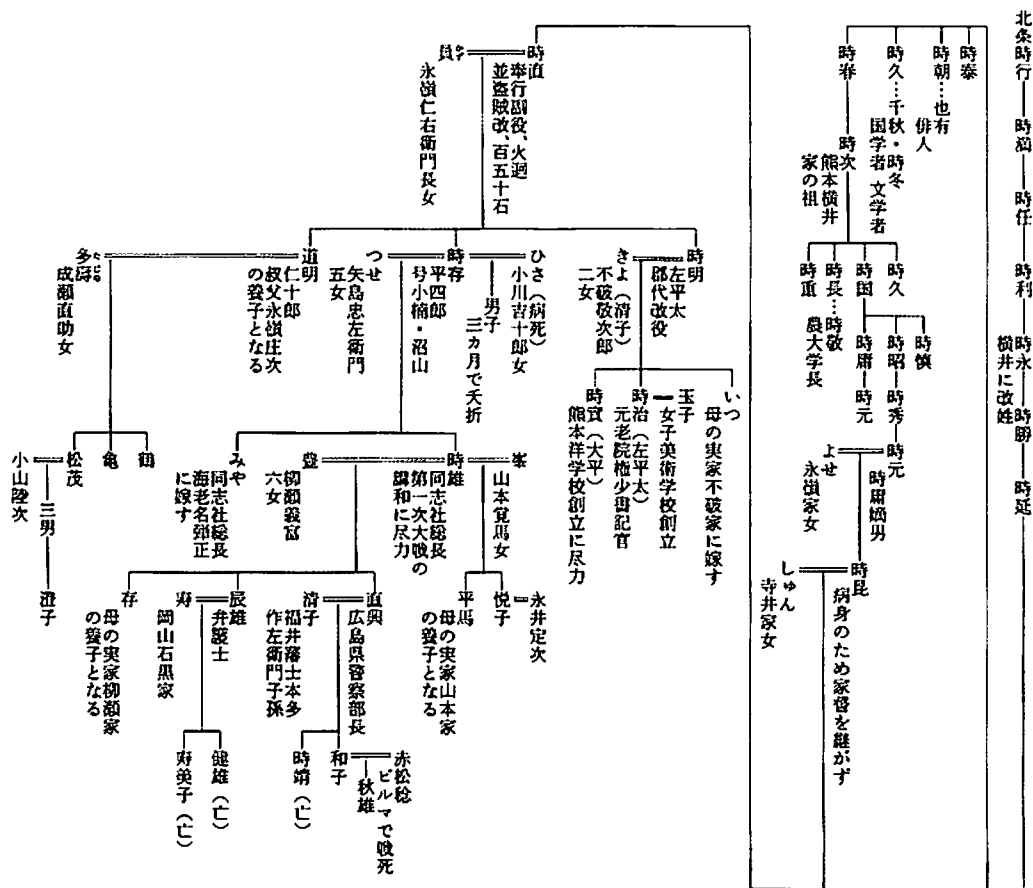
明治2年1月5日

新政府に出仕した帰途暗殺される。

翌6日

朝廷から300両下される。

付録2)
横井家略系図



横井家略系図

* 源了圓他編『横井小楠のすべて』(新人物往来社、1998年)より

第26回熊本大学附属図書館貴重資料展解説目録
新しい横井小楠像の構築を目指して
三澤 純 編著
平成21年10月刊 熊本大学附属図書館